

## 論題 中世哲学における〈ことば〉

司会 早稲田大学 小山宙丸

提題：オッカムとルター——あるいは  
論理学者と十字架のことば学者

北海道大学 清水哲郎

提題：N・クザーヌスにおける Idiota  
の立場と〈ことば〉

京都大学 藺田 坦

(於 東北大学 1991. 11. 17)

司会

小山宙丸

1988年第37回大会より始められた「中世における〈ことば〉」をテーマに掲げた一連のシンポジウムも、今回で四回目を迎えました。

### I. 昨年度までの三回のシンポジウムにおける議論の経緯

さて、この「中世における〈ことば〉」というテーマでの、おそらく締め括りとなる今年のシンポジウムを始めるにあたって、従来の経過を、『中世思想研究』に収録されている記録に従いながら、簡単に振り返っておきたいと思います。

1. 1988年、都立大学で開催された、このテーマでの第一回は、野町啓氏の司会により、加藤武氏と中川純男氏がともに、中世の言葉論の端緒に位置するアウグスティヌスの〈ことば〉について提題されました。その際には、人間の言葉としての〈ことば〉が、1)「音声として響く言葉 *verbum prolativum*」、2)「声を発するに先立ち音節をたどって考えられる言葉 *verbum cogitativum in similitudine soni*」、3)「御言の類似としてのことば」つまり上記二種類の言葉に先立つ根源的な「大文字の *Verbum*」の三種類に、神である御言（みことば）との関係を前提にしつつ分類、想定されていると整理されました。その上で、Vox 声、内なる言葉の現象化であると共に、大文字の *Verbum* と小文字の *verbum*、超越と内在とを微妙に連続させ、永遠と時間とを結ぶ架橋の意味を有することも解明されました。

2. 1989年、関西学院大学で開催された二回目のシンポジウムは、大谷啓治氏の司会により、11世紀、12世紀の言葉論がとりあげられ、古田暁氏がアンセルムス（11世紀）について、岩熊幸男氏が12世紀における「唯名論」nominalism の成立と展開について提題されました。ここでは、第一回で明らかにされたアウグスティヌスの言わば古典的な言葉観からの新たな展開が示されました。古田氏は、アンセルムスにおいて、「感覚的記号を感覚的に扱う」場合と「感覚的記号を非感覚的に思念する」場合という意味論的次元での考察と、「諸物自体を私たちの精神のうちに表現する」場合である存在論的次元での考察が区別されるとした上で、存在論的次元から意味論的次元へとアンセルムスの議論が展開したのは、当時神学に dialectica が導入されて、プラトンの思惟にアリストテレス論理学の方法が適用された結果であると解釈されました。また岩熊氏は、12世紀において、「普遍」は res であるのか vox であるのかという論争があり、vox とした者は vocales と呼ばれていたが、アベラルドゥス（1142死）後に、nominales という呼び名が現れたとされた。総じて見るならば、11～12世紀に、言葉における「ものを名指す機能」と「理解を構成する機能」との分化が成立して、言葉に関する考察が深まったことが明らかとなりました。

3. 1990年の中央大学における第三回目のシンポジウムでは、宮内久光氏の司会により、リーゼンフーパー氏がトマス・アクィナスについて、日下昭夫氏がロージャー・ペーコン（1210/14-1292 以後）について提題されました。それらの内容は、前年のシンポジウムで明らかにされたこと、即ち初期スコラにおいて深化され、それ故にまた分岐することになった言葉論を踏まえつつも、それらを総合する営みの二つの形を示すことになったように思われます。リーゼンフーパー氏は、トマスにおいて「内的言葉とは真理の光と精神の活動とによって生み出されるものであり、事物がその真理に即して現れる場である」ことを明らかにして、トマスにおける真理と言葉との根源における直接的関係を示しました。日下氏は、ペーコンにおけるレトリカとポエティカの位置を叙述して、彼にあっては、「実践的知性を動かす議論」の方が「思弁的知性を動かす議論」に対して優位を占めることを明らかにしました。これは、言うまでもなく、前の時代に展開された弁証的議論 argumentum dialecticum と論証的議論 argumentum demonstrativum の神学における有効性に留保を付けつつ、それらを弁証的議論で補完しようという意図の表れでありましょう。

甚だ簡単ではありますが、以上のように、これまでのシンポジウムの経過を整理し

て御紹介いたしました。

## Ⅱ. 本日の提題について

さて、続いて、ここにおられるお二人の方に提題をして頂くこととなりますが、それに先立って、言わば、今日の見所、聞き所のようなものを、予め皆さんにお示しするのも、司会者の任務の一つかもしれないと考えます。

始めに話して頂く清水氏は、「オッカムとルター」と題されていますが、時代的にだけ考えると、随分と大胆な設定であるように見えます。ご承知のように、オッカムは14世紀前半に活動した人であり、ルターは16世紀前半に活動した人であるからです。二人の間に横たわる二世紀の隔たりを、清水氏はいったいどうするお積もりだろうと考えつつ、目を横に転じますと、そこにはクザーヌスについて提題される藺田氏がおられます。クザーヌスは15世紀の30年代～60年代まで活動した人ですから、何と、ちょうどオッカムとルターの間に立つこととなります。清水氏はここまでお考えになって、大胆な設定をなさったのでしょうか。

このように時代的にはつながりがついた上で、しかし内容的にどのような点で、オッカムとクザーヌス、それにルターの間に関わりがあるのでしょうか。一見なさそうに見えるのですが、すこし立ち入って調べてみますと、実はかなり太い絆が存在していることがわかります。もちろんその具体的に詳細な点につきましては、これからのお二人の提題および、それに引き続いての討論にお任せしなければなりません。今、見通しをつけるために少し紹介させて頂きたいと思います。

先ず、オッカムの「ノミナリズム」に関してですが、一般にわれわれは普遍論争に係わる言語の理論としてそれを知っています。しかし、それはその半面において fideistischer Agnostizismus (信仰主義的な不可知論— Reinhold Weier の言葉<sup>1)</sup>) と称されうる要素をもっております。つまり、オッカムは言語に対するその精緻な考察の結果として、1) われわれが神の完全性に適用する概念は或る種の「神理解」を与えてはくれるが、神の本質は隠れたままに留まるとして、神の gnoseologische Transzendenz を明らかにしたのであり、2) res と、認識およびそれに相応する言表との間の距離が存在することを明らかにしたのですが、しかし、神認識が絶対に不可能であると主張したのではありません。(Hoffmann, *Entwicklung*<sup>2)</sup>) 従って認識は他の方法によって、信仰によって達成されねばなりません。このようなものとしての

fideistischer Agnostizismus という点において、オッカムはクザーヌスにもルターにもつらなっているのです。

清水氏がルターに関して挙げられている「隠れたる神 *deus absconditus*」という思想は、クザーヌスにもこのタイトルをもつ著作があるように、彼においても存在します。さらに、この思想は、William Ockham および Robert Holcot において見てとれるという指摘があります。例えば、オッカムは『命題集』において、「言表では、『神についての何か他のもの』が認識されるだけである」と言っています。(William Ockham, I *Sent.* d.3 q.2 F) このような神学的概念論は、隠れたる神への傾倒の道を開き、その点で神秘神学と、特にその分枝である否定神学に近づくのだと、Fritz Hoffmann は言っています<sup>3)</sup>。

クザーヌスは、私の知る限りオッカムに言及することはしていませんが、彼の著作には多くの箇所にもニナリズム的思想が見られます。例えば、晩年の著作である *Compendium* (『神学綱要』) には次のような一節があります。「何らかの認識の仕方によって到達されるものはすべて、あの、より先なる『ものの存在の仕方』を表示するにすぎない。したがって、これら、認識によって到達されるものは、ものそのものの *ipsa res* ではなく、それらの似姿 *similitudines*、認識形象 *species*、或いはしるし *signa* である。それゆえ、『ものの存在の仕方』についての学知 *scientia* は存在しない——たとえものの存在の仕方が存在することが極めて確実に分かるとしても<sup>4)</sup>」。

さらにルターは、「自分はオッカム派である」と明言しています。彼が若い時に学んだスコラ哲学がオッカム派のものであったことは、よく知られています。

では、クザーヌスとルターの関係はどうでしょうか。これも、単に用いる概念が似ているという以上の関係があったことが研究されています。Reinhold Weier によれば、フランスの15世紀始めの人文主義者ジャック・ルフェーブル *Jacque Lefèvre* がクザーヌスを熱心に学んで、その影響のもとに『詩篇注解』と『パウロ書簡注解』を書いたが、それを若きルターがまた熱心に学んだとのこと<sup>5)</sup>。この本の結論において、Weier は、ルターの主要モチーフである *Gottes Wirken sub contrariis* (反対に働く神の業) のうち、1) 神の *Verfüllung-Offenbarung* (隠れていること—啓示) という対立する関係はクザーヌスと共通であるが、2) *Verzweifelung-Glauben* (懐疑—信仰) という対立する関係は、ルターに特有のものである。その源泉としては、14世紀始め以前に成立した説教集の著者である「ソックス」*Soccus* という名の詳細

不明な人物が考えられている、としています<sup>6)</sup>。

以上のように見て来ますと、オッカムとクザーヌスとルターという三者が、清水氏と蘭田氏がその要旨に記されている「唯名論」、「神秘主義」、「フマニスムス」という三つのキー・ワードで示されるであろうような、太いきずなで結ばれていることが明らかです。それではこれから、この互いに関係を有する三者について、われわれの本日のテーマ「中世における〈ことば〉」に定位して、どのような提題がなされるか、清水氏と蘭田氏のお話を大きな期待と共にお聞きしたいと思います。

### 註

- 1) Reinhold Weier, *Das Thema vom verborgenen Gott von Nikolaus von Kues zu Martin Luther* (Trier 1967), S. 8.
- 2) Fritz Hoffmann, *Entwicklung und Harmonisierung — Zur Stellung des Nikolaus von Kues in der Geschichte des Erkenntnisproblem*, in: *Mitteilungen und Forschungsbeiträge der Cusanus-Gesellschaft* Bd. 12 (Mainz, 1977) S. 82ff.
- 3) Hoffmann, *Ibid.* S. 82ff.
- 4) Nicolaus Cusanus, *Compendium* (Opera Omnia XI-3) C. I.
- 5) Weier, *Ibid.* S. 60; 204.
- 6) Weier, *Ibid.* S. 207.

---

### 提題

#### オッカムとルター

——あるいは論理学者と十字架のことば学者——

清水 哲郎

本提題は中世後期の「ことば」理解の一断面を提示しようとするものである。すなわち、(1)オッカム主義ないし中世後期の唯名論に代表される論理的言語理解はいかなるものであったか、(2)マルティン・ルターはそれを〈十字架の神学〉の立場からどのように批判したか、を分析する。